

小学校における英語活動の可能性

—コミュニケーション能力の基礎を培う英語活動の在り方—

小学校における英語活動研究会議

研修員 塩山 智子（川崎市立古市場小学校）

関野 千穂子（川崎市立新作小学校）

黒川 邦子（川崎市立西中原中学校）

松田 典英（川崎市立稲田中学校）

指導主事 佐藤 剛

I 主題設定の理由

平成14年度より「総合的学習の時間」の国際理解に関する学習の一環として外国語（主に英語）会話を取り入れた活動が認められ、4年が経過した。その実施率は文部科学省が平成17年度2月に行った実施調査によると92.1%で、前年を更に上回っている。

このように英語活動を実施する学校が増える中、中央教育審議会教育課程部会の外国語専門部会において、小学校教育課程における英語の位置づけや在り方等について審議が続けられている。部会の答申では、小学校における英語教育の充実が強調されているが、未だ結論は明らかにされていない。

現在、今までどおりの「総合的な学習の時間」の枠内での英語活動か、または「コミュニケーションの時間」といった「道徳」のような「領域」として扱うか、あるいは教科として位置づけるのかという3つの在り方が検討されている。

本市においても、英語活動としての実践を積み重ねている学校数は年々増加の傾向にあり、ALTやEAF(English Activity Fellow、英語活動補助員)を活用しての英語活動を計画、実践している学校は100校を超えている。しかし、母数が増えるほど1校当たりのALTやEAFの訪問機会が少なくなり、各学校において外国人とのTTの学習計画を立てる難しさが増している。

授業を計画する指導者は、児童たちが何を達成することを手助けしようとしているのか、釈然としないまま、取組に苦慮している面が、実施報告書等からもうかがわれる。

このような実状を踏まえ、本研究会では、昨年度に引き続き、小学生にとって「生きる力」につながる価値ある英語活動はどのようなものかを、小中学校の連携を視野に入れながら検討することにした。また、その中でも、外国語の目標となっているコミュニケーション能力の基礎を培うことに焦点を絞ることにした。

II 研究内容

1 研究の仮説

言語に関する新しい教科を設けるのであれば、単に英語力を上げるためのものではなく、初等教育の根幹をなす、他者と関わる力の育成をめざした、コミュニケーション重視の「伝える力、聴く力」を養うことをねらいとしたものでなければならない。英語母国語話者のような英語を目標とするのではなく、日本語を土台として、手持ちの表現手段を用いて何とかコミュニケーションを図ろうとする力を培い、自ら他言語を活用学習しようとする気持ちを育てることが大切である。

また、ローマ字を活用し、英語をはじめとする他言語の基礎となるアルファベットの音声と文字を扱うことが、コミュニケーション能力の基礎を培うことになる考えた。

2 研究の方法と内容

(1) 国語と外国語に共通するコミュニケーションの基礎を指導要領から読みとる

中学校においては、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」ことが「中学校学習指導要領 解説 外国語編」において目標として設定されている。

一方、小学校の「小学校学習指導要領解説 国語編」においては、「伝え合う力」掲げ、特に入門期においては、「話すこと・聞くこと」の重要性が謳われている。言語を効率的に獲得させるねらいではなく、人間同士がかかわりあうことの意味や難しさなどに気づき、言語と非言語を使用して他者や社会との関係性をつくり上げる、コミュニケーションとういことに注目している。

実践的なコミュニケーション能力の基礎を養うことは、実は小学校入学時から始まっており、小中の教諭には9年間のスパンで、小学校と中学校が互いの指導要領を基本理念に、縦横自在に、総合的に連携しあう姿勢が必要であると考えた。

(2) 小学生の学習の特性を先行研究、授業観察等から明らかにする

まず、小学校の児童の学習への取組の特徴を整理することにした。小学校では低学年、中学年、高学年という発達段階の節があるが、年齢が低いほど音声を真似る耳の良さがある。聞いたことを先入観なく、素直に自分の音声として発音することができる。このことから、音声重視の指導が適切であると考えた。また、モデルになる音声教材については、英語を母国語とする者を活用して作成することが望ましい。

一方、この段階では、論理的な思考、取り分け演繹的な思考はまだ使用できないので、文法指導は向かない。そこで、繰り返しの経験から帰納的な考えにより、法則を類推し、実感していく、体験中心の活動が望ましいと考えた。

(3) 中学生の外国語学習の実態から小学校で必要と思われる指導内容を検討する

中学校においては、英語は数学と並び苦戦している生徒が多い教科である。特に英語が読めない生徒が多い。これは、アルファベットは表音文字であり、アルファベットの名前を知っていても、単語を読む上では、何の手がかりにもならないことに由来している。そこで、小学校でのアルファベットの音声指導を通して、その基礎を培える可能性があると考えた。

3 研究をもとにした指導内容のモデル

(1) 学年ごとの目標

- 低学年：英語について興味をもたせる。
- 中学年：英語について楽しみながら、進んで活動させる。
- 高学年：身の回りの単語、簡単なあいさつについて英語で表現することができる。

アルファベット、ローマ字、フォニックスなどについて理解し、書くことができる。

(2) 小学校で行いたい領域

- 身の回りの単語
- 簡単なあいさつなどの一言表現
- 簡単な疑問文
- 絵本や紙芝居、コンピュータなどを使いながらの読み聞かせ
- 歌、チャンツ
- アルファベット・ローマ字・フォニックス

(3) 1 単位時間の授業の展開例

過 程	指 導 内 容
①あいさつ	英語で元気にあいさつをし、交流をする。
②歌や動作・チャンツ	ウォームアップになるように、体全体で発声よく歌う。
③既習表現の活用	学習した表現をもとに、明るい雰囲気でのコミュニケーション活動を行う。 楽しい雰囲気づくりを心掛ける。
④メイン・アクティビティ	中心となる活動。子どもの興味や関心をそそる教材や指導方法を工夫して、本時のねらいの実現を図る。(カードゲームなど) 注意したいのは、その時間で終わってしまうような活動ではなく、次の時間に生きるような活動にする。くり返し表現などを盛り込んでいく。また、退屈させたり急がせたりしないようにする。子どもの実態に応じた展開をする。
⑤読み聞かせ	想像力が沸くような絵本などを用いる。できれば付属のCDを利用する。これは本物の音に慣れさせることが目的である。また、最後に読み聞かせを行うことで、心を落ち着けて授業を終えることができる。
⑥まとめ	本時の学習内容を振り返る。
⑦あいさつ	元気にあいさつをして、締めくくる。

(4) アルファベット・ローマ字・フォニックスの活用

○「ローマ字をビンゴゲームでマスターする」

(<http://fish.miracle.ne.jp/k-teru/bingolist1.htm> 参照)

○フォニックスについて (中には特別な読み方も存在するが、全体の75%は当てはまる。)

■ 26文字の基本フォニックス表 (カタカナ表記は多少音が異なる)

a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r
ア	ブ	ク	ドゥ	エ	フ	グ	ハ	イ	ジュ	ク	ル	ム	ン	オ	プ	クわ	ウル

s	t	u	v	w	x	y	z
ス	トゥ	ア	ヴ	ウ	クス	イヤ	ズ

■ フォニックス二文字音の表

a b	e b	i b	o b	u b
アブ	エブ	イブ	オブ	アブ

■ フォニックス三文字単語の読み方

d + o + g = ドウ + オ + グ ⇒ d o g (ドオッグ) 犬

c + a + t = ク + ア + トウ ⇒ c a t (キャット) 猫

※リズムよく読んでみよう

- ・ bag - cat - hat - man - jam
- ・ pen - men - ten - bed - red
- ・ pig - big - sit - six - pin
- ・ box - hot - stop - mom - top

・ cup - run - sun - bus - cut

授業では、汎用性の高いアルファベットのカードを利用し、アルファベットの音声をフォニックスとして導入しながら、他言語である英語の単語が自力で読める体験をさせる。挨拶等の普遍的なやりとりをもれなく大切に扱うことに心掛けた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

「基礎」をそれがなくては先に進むことができない要素とすると、アルファベットの名前ではなく、音声と文字そのもの習得こそが、基礎を培うことになることが確認できた。また、英語活動を世界共通の普遍的な人間同士のコミュニケーションに必要な力をつける機会ととらえることもできた。その際、場面に応じた立ち振る舞いや言葉の使い方を、簡便な英語の運用により体感させることにより、身につけていける。授業のねらいを「実践的なコミュニケーションの基礎を培う」ことに集約することにより、今後義務教育9年間を通してのカリキュラムの開発の必要性を確認することができた。

2 今後の課題

小学校の国語と中学校の外国語（英語）の共通するねらいを確認し、小中連携の視点から、今後更にそれぞれでなすべき内容を精査することが大切であると考え。特に、小学校4年生の国語でローマ字を習得することになっており、それを生かす指導内容や方法等を開発していくことが重要である。

また、担任が臆せず英語を使用する姿を見せつつ、一方で良質な音声教材を聴かせることが重要である。現在、様々な会社から多種多様の教材が出ている中、その一つ一つを吟味して提案することは困難であった。この点については引き続き、様々な学校で評価を得ている教材や自己開発したものを紹介し合うことが期待される。

本研究を進めるにあたり、適切なお指導、ご助言をいただいた先生方、研究をご支援いただいた研修員所属校の校長先生をはじめ教職員の皆様に心からお礼を申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|---|-------|
| 樋口 忠彦『これからの小学校英語教育』研究社 | 2005年 |
| 山田雄一郎『英語教育はなぜ間違えるのか』ちくま新書 | 2005年 |
| 渡邊 寛治『小学校英会話学習の実態調査とその学習評価の在り方に関する実際的研究』国立教育政策研究所 | 2005年 |
| 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社 | 2004年 |
| 『小学校英語活動実践の手引き』文部科学省 | 2001年 |